

近場の旅「木戸場」と「大土手山」探訪の記

<1> 北総台地のむかしむかし

江戸時代以前の北総台地は、小金牧・佐倉牧など馬を放牧する牧として名が通っていた。江戸時代に入ると、牧は幕府直轄となり軍馬の育成にも力が注がれるようになった。

牧の囲いの木戸があった所は、高根木戸・仲木戸などの地名が今でも残っている。

嘉永6年(1853年)及び嘉永7年(1854年)に二度にわたってペリーが来航したことにより、幕府としてはいくつかの課題が残り、対処策を急ぐことになった。

佐倉藩の堀田正睦(まさよし)は、江戸湾の警備強化策として嘉永7年(1854年)に湾内に六つの砲台築造の任に就いた。砲台は「台場」と呼ばれて、現在は通称「お台場」という地名になって残っている。

砲台(台場)を築くための木材が切り出されたのは、現在の四街道市萱橋と言われている。

萱橋は、東関東自動車道が四街道ICの手前で手繰川を渡る所の北側の里山で、現在の地形から見ると立派な材木が多量に準備できるほどの大きな山は見あたらないが、当時は立派な山林があったのかもしれない。

(萱橋はこのあたり <https://yahoo.jp/93npgg>)

<2> 西洋砲術の導入から軍都誕生へ

ペリー来航より約10年前の天保12年(1841年)、佐倉藩では西洋砲術の導入を目的として下志津(現佐倉市下志津)に砲術射的場を設置した。佐倉藩では西洋の学術(蘭学)の導入を奨励し、我が国の開国に向けた基盤作りに力を入れていた。文久元年(1861年)に下志津の木戸場(現在の佐倉市下志津)で西洋砲術の演習が行なわれた。面積約20ヘクタールの火薬所という記録が残っているらしい。

明治に入り、佐倉藩のこれらの技術や施策は新政府に受け継がれて、富国強兵の国策のベースになった。

明治6年(1873年)、政府はフランス陸軍からジョルジュ・ボン砲兵大尉を教官として招聘して指導を受け、技術の向上に努めた。ここから発射した砲弾の標的として、約3Km南に大土手山(後述)が築造された。

明治19年(1886年)、木戸場の砲術射的場は陸軍砲兵射的学校と名を変えた。明治27年(1894年)に総武本線が開通し四街道駅が開設されたことに伴って、学校は明治30年(1897年)に四街道に移転し陸軍野戦砲兵学校となった。その後周囲に軍関係の諸施設が拡充されて、昭和20年(1945年)まで続く軍都千葉・軍都四街道の始まりになった。

<3> 木戸場はどこだ

天保12年の西洋砲術がどの程度のものか気になったが、それ以上に木戸場がどこにあるのかの方が気になった。インターネット上の情報を頼りにして、さらに国土地理院の地形図を眺めていたら、「木戸場」は意外にも我が家から近い所にあった。(木戸場はここ <https://yahoo.jp/JGdttL>)

佐倉市南端の下志津に「木戸場」という地名を見つけた。今は町の名としては残っていないが、国土地理院の地形図にはまだ集落の表記が残されていることがわかり、早速出かけてみた。

四街道駅から北へ向かう県道155号線を走り、東関東自動車道を跨ぐ。しばらく行くと四街道市と佐倉市の市境にある変則的な四つ角を北東方向(佐倉方面)に進むと「木戸場」というバス停があった。

目的地まで辿り着いてみると、東邦大学佐倉病院の横から四街道方面へ抜ける道で、何度も通ったことのある道だった。田舎の道路沿いの小さな集落という風情の所で、アコーディアガーデンというゴルフ場が出来る前は車の通りも少ない所だった。高根木戸や仲木戸と同じように、下総の牧の東端に位置する木戸があったところなのかもしれない。

バス停の横にある「下志津ふれあい会館」の脇に車を停めて付近を散策すること数回。点在する集落とその間を結ぶ農地と山林、いくつもある解体作業現場や産業廃棄物の集積場。ここに西洋砲術射的場や陸軍野戦砲兵学校があったことを記す遺構や記念碑は何も見つけられなかった。

原点に戻り、昭和初期・大正初期の国土地理院の地形図を読み直してみることにした。

大正6年の地形図の一部を複写して、モノクロの地形図上の海拔25mの等高線を色鉛筆で茶色く塗って、囲ま

れたエリアに彩色してみた。すると、手繰川(たぐりがわ)と小深川(こぶけがわ)の支流の谷が複雑に入り組んでいる25mの台地が広がっている様子が浮かび上がってきた。台地はV字型をしており、東側の台地には木戸場集落の南側に「木戸場岡」と記されており、西側の台地には「元学校」と記されている。集落の大きさの何十倍もありそうな広い台地全体が「元学校」ということは、これが西洋砲術射的場(のちの陸軍野戦砲兵射的學校)があった場所なのかもしれない。(最終ページの画像参照)

地形図を細かく読み取ってみると、監的・警戒標・模造家屋などの演習場としての設備がいたるところに配置されており、並木や土堤・土塁などがいくつも記されている。

さて結論を出しはしたものの、確証を得なければ終われない。この場所は、現在の地図で(つまり実際の場所は)どこなのか。次のテーマが登場し、まだまだ終れなくなってしまった。

<4> あの山は何だろう

そんな所に深入りして様々な情報を調べている最中、畑からの帰り道で四街道市文化センターの交差点をいつものように左折して大日五叉路の信号待ちの行列に並んだ。さほど渋滞する交差点でもないのに、いつも信号の替り目を見落とさぬように前を向いているのだが、なぜかこの日は周りの景色を観察していた。酒屋の脇の路地に三角の小山があるのが見えた。こんな所に山があるのは不思議とと思って、帰宅後に早速調べて見た。

山の名前は「大土手山(又の名をルボン山)」ということがわかった。インターネット上でわかった情報によると、佐倉藩が木戸場に造った西洋砲術射的場の標的として造られた人工の山であることがわかった。

前述の様に砲術射的場は明治に入って明治政府に受け継がれて、陸軍野戦砲兵學校となり、フランス陸軍のジョルジュ・ルボン大尉の指導の下に、さらに新しい砲術の訓練を行なうようになった。これまでに使用していた大土手山にルボン大尉の助言を得て手を加えて完成したことからルボン山と言うようになったとのことだった。

陸軍野戦砲兵學校は明治30年に四街道(大土手山がある所)に移転し、さらに陸軍の施設として増強された。そして、陸軍野戦砲兵學校の砲術訓練の標的は、木戸場に設けられて立場が逆転することになった。大土手山はその後、皇族や要人の視察時の立ち見台としても使われた。

<5> 大土手山に登ってみよう

早速この山に登ってみることにした。路地裏に入り真下から眺めると、四街道市文化センターとマンションの間にはさまるで立っている円錐状の小山の高さは5~6mはあるように見えた。70段ほどの石段を登ると狭い頂上には藤棚と石のベンチがあり、突起物の少ない四街道の町がよく見える展望台だった。特に背の高い建造物がない西側の展望が良く、日没鑑賞には持ってこいの感じがした。

平坦地が多い四街道でこれほどの高さがある三角点がないのは不思議だと思って、帰宅後に調べて見た。

大正時代・昭和初期の地形図を見ると陸軍野戦砲兵射撃學校の施設の中に海拔32.7mの三角点が記されているが、その場所は大土手山から南南東に離れた軍隊の建造物のある場所だった。現在イトーヨーカドーがある所なのでもはや確認は不可能。

ところが、ここで現在の地形図を開いて見たら大土手山の10mほど西側の空き地に25.1mの三角点があることになっている。行って見ると「大熊記念コミュニティセンター」跡地の空き地で、現在は町会の自治会館が建つ公園になっていた。

戦後、陸軍の施設を解体した時に消えてしまった32.7mの三角点の代わりに公園内に25.1mの三角点を設けたのだろうか。それにしても立派な大土手山があるのに、その影に隠れた低い場所に三角点を設置するというのも考えにくいことだが……。

(大土手山はここ <https://yahoo.jp/3gvTwR>)

<6> 石碑が語る史実

東邦大学佐倉病院の南西にある下志津の旧来の集落の中に報恩寺という寺がある。木戸場に向かう県道から



西へ 200mほど入った所で、正式名称は「臨濟宗妙心寺派大雄山報恩寺」。1350年頃の創建、開山は夢想国師、開基は志津次郎胤氏。志津次郎胤氏は千葉氏の分家である臼井氏の流れにあり、志津城を構えていた武将。両親の恩に報いるべく志津城近くに寺を建てたとのこと。寺紋は千葉氏の「九曜星」。佐倉藩の砲術射的場があったことを示す情報が何か残っていないかと狙ってこの寺に来てみたのだが、残念ながら期待していたような情報は見つけれなかった。しかし、墓地を覗いて見ると古い軍人の墓石が数え切れないほどに残っており、軍隊との関係はかなり深そうな空気を感じた。

寺を出て県道に向かって歩くと、数軒東側の家(下志津828番地)の生け垣の中に石碑が建っていた。覗き込んで文字を読んでみたら、昭和40年に建てられた石碑には、「この地に天保13年に佐倉藩の砲術射的場が造られ、後に四街道に移転して野戦砲兵学校になった」ことが記されていた。(<https://yahoo.jp/Prvfz9>)

改めて地図上で確認すると、この地は西洋砲術射的場の北端にあたることになる。少々気をよくして、再び木戸場の集落に車を置いて中志津・下志津の里山や谷津を歩いて見たが、これと言った収穫はなかった。無数の廃棄物処理業者のヤードが点在していて里山の中に潜入することはできなかったが、砲術射的所があったという証拠を見つけることができたので、何となくこれで締めくくれるような気分になってきた。

前日、地元のケーブルテレビ局の web の中に志津の歴史散策情報を見つけた。散策ルートを記した地図の上に思いがけないものを発見した。「日本砲兵揺籃の地」という石碑が佐倉市下志津原の南端(四街道との市境)に近い所にあることを示していた。

夕暮が近い下志津原を走ってその場所(佐倉市下志津原186-1の北隣)へ立ち寄って見た。きれいに区画整理された下志津原の南端と隣の四街道市大日は太平洋戦争終結後に開拓地になったと思われる。現在は工業団地と空き地が点在する形になっており、それらの間に挟まるように石碑が建っていた。

軍国主義へのノスタルジーで出来たものなのか、悪しき時代への振り返りとして出来たものなのかはわからないが、「史実の伝承」が時代の流れに押しつぶされることなく続いているのだと読み取れば、これまた素晴らしいことだと言うことが出来る。(<https://yahoo.jp/4pd8Gn>)

佐倉藩の時代から明治30年の四街道移転までの間、このような施設ができたことで賑わった下志津・下志津原の一角に、「下志津原一丁目」という俗称の遊興街が存在したようだが、残念ながらその場所がどこかを確認することはできなかった。

いくつかの物事について「確かにここにあった」ことを我が目で確認することは面白い。不思議な満足感に包まれて、帰路は「発見したもの」を振り返り再確認するように、下志津原・南志津・下志津・木戸場・畦田と遠廻りをして帰宅した。

以上

●木戸場と大土手山に関する歴史年表

	国の出来事	下総の出来事
1841年(天保12年)		佐倉藩:木戸場に砲術射的場を設置
1853年(嘉永6年)	ペリー来航(一回目)	
1854年(嘉永7年)	ペリー来航(二回目)	
同上	東京湾に台場を築造し砲台設置	萱橋から木材を切り出し
1861年(文久元年)		佐倉藩:木戸場で西洋砲術の演習を実施
1868年(明治元年)	明治維新	
1873年(明治6年)	ジョルジュ・ルボン大尉を招聘	
同上	徴兵令を施行	
1874年(明治7年)	陸軍習志野演習場が誕生	
1886年(明治19年)	佐倉木戸場に陸軍砲兵射的學校を開設	
1897年(明治30年)	木戸場から四街道に移転し陸軍野戦砲兵學校と改称	

●参考情報

下総台地の160年

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/shimo160.pdf>

●木戸場・大土手山探訪画像

大土手山はどこだ？
四街道市で一番高い山かもしれない!!

佐倉藩の砲術演習場はここにあった

元学校

木戸場岡

木戸場はどこだ？

木戸場集落

大正6年の地形図

頂上からの眺め

近くにあって 三角点25.1m

史実を語る石碑があった
佐倉藩の西洋砲術射的場があったことを記す石碑 (佐倉市下志津)

日本砲兵摇篮の地石碑(佐倉市下志津原)